

# マフラ・セム祖語の 音韻再建に関する諸問題<sup>1</sup>

二ノ宮崇司

## 1 はじめに

マフラ・セム諸語 (Mahrian Semitic=MahS) は主にアラビア半島南部のイエメンとオマーンの両国内で話されている。MahS の分布は図 1 のとおりである。

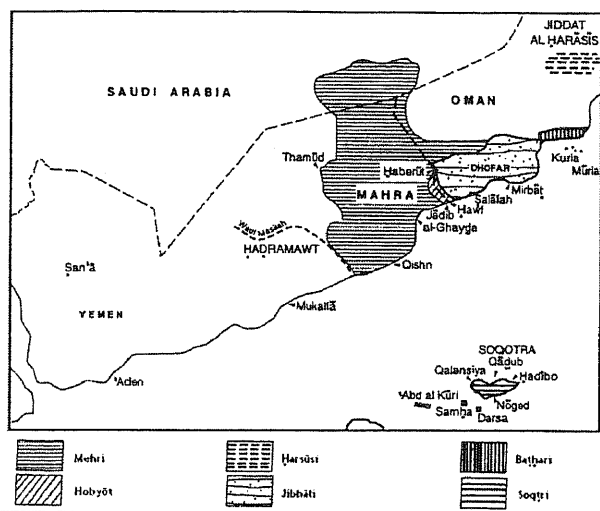


図 1 Simeone-Senelle (1998: 381) より転載。

<sup>1</sup> 本稿で用いる略号は次の通りである。MahS=マフラ・セム諸語、proto-MahS=マフラ・セム祖語、proto-S=セム祖語、Mhr.=メフリ語、Hrs.=ハルスースィ語、Jib.=ジッバーリ語、Soq.=ソコトゥリ語、Arb.=アラビア語。

本稿においてマフラ・セム祖語 (proto Mahrian Semitic=proto-MahS) 再建のために用いる言語は、メフリ語 (Mehri=Mhr.)、ハルスースィ語 (Harsüsi=Hrs.)、ジッバーリ語 (Jibbali=Jib.)、ソコトゥリ語 (Soqotri=Soq.) の4言語である。Mhr.とJib.は互いに言語使用地域が連続しているのに対し、Hrs.はMhr.とJib.の連続体から地理的に離れている。また、Soq.は海に囲まれており、Mhr., Hrs., Jib.と地理的に離れている。MahSはアラビア語圏内にあり、アラビア語からの影響が見られる。

MahSはセム語研究の中で、一般的に現代南アラビア諸語 (MSA=Modern South Arabian) と呼ばれている。MSAは古代南アラビア諸語 (OSA=Old South Arabian、あるいはESA=Epigraphic South Arabian) と対をなす呼び名である。OSAは計29の子音文字からなる古代南アラビア文字によって書かれたサバ語、ミナ語、カタバ語、ハドラマウト語などの総称である。セム語におけるOSAの系統的位置づけについては現在まで議論が続いており、決着がつかない。Hetzron (1976), Huehnergard (1992) のような南セム語への分類、あるいはVoigt (1987), Huehnergard (2004) のような中央セム語への分類という2つの可能性が示されている。それに対し、MahS (MSA) がエチオピア・セム諸語を含む南セム語へ帰属することは確実とされている (Huehnergard 2004)。OSAの分類が揺れている以上、OSAとの系統的関連性があたかもありそうに見えるMSAの呼び名を使用せず、本稿ではHuehnergard (2004) で用いられているマフラ・セム諸語<sup>2</sup>の呼び名を用いる。また、現代南アラビア諸語とすると、中央セム語に属するアラビア語の一部であると専門家以外から誤解を招く可能性もあるので、マフラ・セム諸語の呼び名が妥当といえる。セム語内のMahSの位置を図2で示しておく。

本稿ではMahSの音韻の概略を示し、MahSからproto-MahSの再建に関する問題点を指摘する。MahSの歴史的音声・音韻研究は、古くはLeslau (1937, 1938) によって進められた。近年はFaber (1986), Militarev & Kogan (2000) がセム祖語研究の一部としてMahSに言及している。Leslau, Faber, Militarev & Koganは、子音の起源を議論の中核としており、子音の音環境<sup>3</sup>として母音に

<sup>2</sup> マフラ (al-mahrah) 地域を中心とする地域で話されているという意味である。

<sup>3</sup> 例えば、Leslau (1937: 211) は  $\int$  の1つの起源として \*k の硬口蓋化 (\*k のうしろには

も一部言及しているが、概ね、子音の音対応<sup>4</sup>に話を留めている。また、プロソディーを積極的に議論に絡めることはない。子音のみという部分論への危惧から単語レベルでの再建が必要となる。即ち、子音のみならず、母音、プロソディーも考慮の対象とする必要がある。

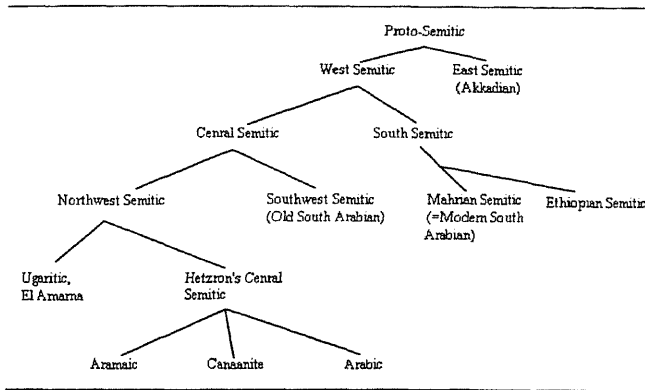


図 2 Voigt (1998: 15) を基に作図。

MahS, proto-S, Arb.の言語資料を挙げる際に用いる文献は次のように [ ] で示す<sup>5</sup>。それ以外のもを使用する際は、その都度、文献名を挙げる。

Mhr.: Johnstone (1987) [J1]

Hrs.: Johnstone (1977) [J2]

Jib.: Johnstone (1981) [J3]

Soq.: Leslau (1938) [L4], Johnstone (1981) [J4a], Nakano (1986) [N4],  
Johnstone (1987) [J4b], Simeone-Senelle & Lonnet (1991) [SL4]

proto-S: Militarev & Kogan (2000) [M&Ka], Blažek (2001) [B], Fox (2003) [F],  
Militarev & Kogan (2005) [M&Kb]

Arb.: de Biberstein-Kazimirski (1860) [BK]

前寄りの狭母音がくる) を挙げている。

<sup>4</sup> 例えば、Leslau (1938: 32) はアラビア語で  $\int$ 、ヘブライ語で  $\text{š}$ 、MahS で  $\text{š}$  などのような対応を挙げている。

<sup>5</sup> 例えば、‘belly’  $\text{kiraš}$  [J1: 214] は、Johnstone (1987) の p.214 から引用した Mhr.の資料であることを示す。

## 2 マフラ・セム諸語の音韻

本節では、MahS の音韻体系の概略を示す。母音は i, e, a, o, u の 5 つ以上が見られる。また、プロソディーはストレス (Johnstone 1975: 10) と母音の長短のみが記述の対象になっており、高低は考慮されていない。子音は数が極めて多く、セム諸語の中でも最も proto-S の子音体系に近いとされる (Simeone-Senelle 1998: 382)。先行研究では子音の記述が充実しているのに対し、母音とプロソディーの記述が粗いという問題がある。

### 2.1 メフリ語の音韻

Johnstone (1975, 1977, 1987), Nakano (1986) で、Mhr. の音韻体系が示されている。Nakano (1986: iv) は表 1 のような 5 母音体系を採用しているが、Johnstone (1987: xiii-xiv) は表 2 のような 7 母音体系を採用している。

表 1

i	u
e	o
a	

表 2

i		u
e	ə	o
ɛ		
a		

Mhr. のアクセントは Simeone-Senelle (1998: 382) でストレスとされる<sup>6</sup>。子

<sup>6</sup> 'be:ðər 'seed', məl'hɑ:t 'salt' のように、ストレスは長母音のある音節に置かれる (Lonnet & Simeone-Senelle 1997: 354)。母音はストレスの置かれない所では弱化した ə になる傾向にあるが、'bəhi 'by two of them' のように、短母音のみであれば、初頭音節にストレスが置かれ、ストレスの置かれる所でも ə が見られ、単純に ə を弱化母音とみなすことはできない。むしろ、ストレスの置かれる所での ə は中央化母音と考えた方がよいかもしれない。ri:'k'o:k' 'fine' のように、最終音節の母音が長ければ、長母音が複数あっても、ス

音の目録は次の通りである。

表 3

Mhr.	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	咽頭音	声門音
破裂音	b			t d			k g		ʔ
鼻音	m			n <sup>*イ</sup>					
ふるえ音				r					
摩擦音		f	θ δ	s z	ʃ		x ɣ	ħ ʕ <sup>*ロ</sup>	h
側面摩擦音				t̪ ɬ					
接近音	w					j			
側面接近音				l					
喉頭化音			ð <sup>*ハ</sup>						
放出音				t' s' <sup>*ニ</sup>	ʃ' <sup>*ニ</sup>		k'		

\*イ 軟口蓋の前では、[ŋ] になる (Lonnet & Simeone-Senelle 1983: 201)。

\*ロ Arb.からの借用語に現れる (Johnstone 1977: xii-xiii, xx)。

\*ハ 無声喉頭化音 [θ'] として実現する場合がある (Johnstone 1977: xii, xx)。

\*ニ Johnstone (1977: xii, xx), Nakano (1986: iv) は放出音としているが、中野 (1992: 292) は喉頭化音として実現する場合があるという。

## 2.2 ハルスースイ語の音韻

Johnstone (1975, 1977) で Hrs.の音韻体系が示され、表4のような6母音体系を採用している (Johnstone 1977: xiii-xx)。

表 4

i		u
e	ə	o
	a	

トレスは最終音節に置かれる (Simeone-Senelle 1998: 382)。

Hrs.のアクセントは Simeone-Senelle (1998: 382) でストレスとされる<sup>7</sup>。Hrs.の子音体系は Mhr.と同じである (表5)。

表 5

Hrs.	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	咽頭音	声門音
破裂音	b			t d			k g		ʔ
鼻音	m			n					
ふるえ音				r					
摩擦音		f	θ ð	s z	ʃ		x ɣ	ħ ʕ <sup>*h</sup>	h
側面摩擦音				ʧ ʤ					
接近音	w					j			
側面接近音				l					
喉頭化音			ð <sup>*h</sup>						
放出音				t' s <sup>*h</sup>	ʃ <sup>*h</sup>		k'		

\*ホ Mhr.と同様、Arb.からの借用語に現れる (Johnstone 1977: xii-xiii)。

\*へ Mhr.と同様、無声喉頭化音 [θ'] として実現する場合がある (Johnstone 1977: xii)。

\*ト Mhr.と同様、Johnstone (1977: xii) は放出音としている。

### 2.3 ジッバーリ語の音韻

Johnstone (1975, 1977, 1981), Nakano (1986) で Jib.の音韻体系が示されている。Nakano (1986: vi) は表6のような7母音体系を採用しているが、Johnstone (1981: xv) は表7のような8母音体系を採用している。起源的な \*m が母音間で消失し、母音が鼻音化する現象が見られる。また、stød のような声門狭め音が見られる (中野 1998: 18)<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> Mhr.のストレスに関する記述は全て Hrs.にあてはまる。

<sup>8</sup> Johnstone (1981: xiv) は咽頭化母音としている。

表 6

i	u
e	o
ɛ	ɔ
a	

表 7

i		u
e	ə	o
ɛ		ɔ
a		

Jib.のアクセントは Simeone-Senelle (1998: 382) ストレスとされる<sup>9</sup>。子音目録は次の通りである。

表 8

Jib.	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	舌背	硬口蓋音	軟口蓋音	咽頭音	声門音
破裂音	b			t d				k g		ʔ
鼻音	m			n						
ふるえ音				r						
摩擦音		f	θ ð	s z	ʃ	ç <sup>Y*</sup> ʒ <sup>Y*</sup>		x ɣ	h ʕ	h
側面摩擦音				ʃ						
接近音	w						j			
側面接近音				l			ʎ <sup>Y*</sup>			
側面破裂音				d̪ <sup>Y*</sup>						
喉頭化音			ð <sup>Y*</sup>			ç <sup>Y*</sup>				
放出音				t' s <sup>Y*</sup>				k'		

<sup>9</sup> 長母音ある音節にストレスが置かれる点とストレスの置かれる音節でも ə が見られる点は、他の MahS と同じである。ただし、'e'mes [ɛ:me:s] 'her mother' (Johnstone 1977: xxi からの例) のように、Lonnet & Simeone-Senelle (1997: 355) は 1つの単語が等しく卓立した音節を複数持ち得る (un mot peut avoir plusieurs syllabes également proéminentes) と述べている。一般にストレスは 1単語内の 1箇所だけに置かれるが、言語教育においては第 2 ストレスを認める場合もある。Jib.のストレスは卓立が等しいものとされており、第 2 ストレスがあると断定できない。本稿でも先行研究に従い、止む無く 'e'mes のように表す。

- \*チ Nakano (1986: vi) によれば、 $\text{ɕ}^y$  は「舌背歯茎を示し、…  $\text{ʃ}$  と調音点  
が同じであり、円唇化を伴うが、 $\text{w}$  は伴わない」されている。また、  
中野 (1998: 17) は後部歯茎から硬口蓋の摩擦音が軟口蓋化した音と  
しており、実態がよく分からない。Johnstone (1984) は無声音  $\text{ɕ}^y$  だけ  
でなく、有声音  $\text{ɕ}^y$ 、喉頭化音  $\text{ɕ}^y$  も音素として認めている。
- \*リ l の硬口蓋化した変種として実現する場合がある (Johnstone 1981:  
xiv)。
- \*ヌ 破擦性を伴う (Johnstone 1981: xiv)。
- \*ル Mhr.と同様、無声喉頭化音 [ $\text{θ}'$ ] として実現する場合がある (Johnstone  
1977: xxi)。
- \*ヲ Mhr.と同様、Johnstone (1977: xii, xx) は放出音としているが、中野  
(1992: 292) は喉頭化音として実現する場合があるという。

## 2.4 ソコトゥリ語の音韻

Leslau (1938), Johnstone (1968, 1977), Nakano (1986), Simeone-Senelle (1997)  
で、Soq.の音韻体系が示されている。Leslau (1938: 43), Nakano (1986: vii) は 表  
9 のような 5 母音体系を採用しているが、Simeone-Senelle (1997: 809-810) は  
表 10 のような 8 母音体系を採用している。

表 9

i	u
e	o
a	

表 10

i	u
e	ə
ɛ	ɔ
a	



Soq.のアクセントは Simeone-Senelle (1998: 382) でストレスとされる<sup>10</sup>。子音目録は次の通りである。

表 11

Soq.	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	喉頭音	声門音
破裂音	b			t d			k g <sup>*カ</sup>		ʔ
鼻音	m			n					
ふるえ音				r					
摩擦音		f		s z ʃ				ħ ʕ h	
側面摩擦音				t̪ ʒ̪					
接近音	w						j		
側面接近音				l					
喉頭化音				ð <sup>*カ</sup>					
放出音				t' s <sup>*タ</sup>			k'		

\*ワ g の異音として [ʒ], [j] が現れる場合がある (Nakano 1986: vii)。

\*カ 特に Arb.からの借用語に現れる (Leslau 1938: 31)。

\*ヨ 喉頭化音として実現する (Simeone-Senelle & Lonnet 1991: 1446)。

\*タ Mhr.と同様、Johnstone (1977: xii, xxii) は放出音としているが、中野 (1992: 292, 293) は喉頭化音として実現する場合があるという。

### 3 マフラ・セム祖語の音韻再建の問題

本節では、proto-MahS の再建の基本となる音対応を示し、問題点を指摘する。proto-MahS の本格的な再建はしない。また、ある程度研究が進められている proto-S の再建形を提示し、proto-MahS がいかなる状況にあるかについても考察する。

<sup>10</sup> 長母音ある音節にストレスが置かれる点とストレスの置かれる音節でも ə が見られる点は、他の MahS と同じである。ストレスは語末から第2、あるいは第3音節に置かれる (Leslau 1938: 43)。

### 3.1 母音とプロソディーの問題

proto-MahS における母音の実態については不明な点が少なくないが、proto-S の母音は表 12 のような 3 母音体系であったとされる (Huehnergard 2004: 144)。

表 12

*i	*u
*a	

Lonnet & Simeone-Senelle (1997: 351) は proto-MSA (=proto-MahS) の母音体系がセム祖語の a u i - a: u: i: と MSA の母音体系の中間にあると述べている。中野 (1992: 293) が「セム語でやや規範化された 3 母音説に対し、もっと数の多い母音組織を呈示する説の材料として、欠くことができない言語である」と指摘している。Militarev & Kogan (2000: cxxv) も MSA (=MahS) の母音の歴史は比較セム語学の中でも不明な部分が多いと述べているように、proto-S 並びに proto-MahS の母音には研究の余地が十分に残されている。

proto-S の母音には長短があったとされる (Huehnergard 2004: 144)。また、非弁別的なストレスを持っていたとされる (Huehnergard 2004: 145)。proto-MahS のアクセントは、全ての MahS でストレスが置かれない音節の母音が弱化する現象が見られるので、暫定的にストレスと考える。

以下、MahS の資料と proto-S の再建形を示し、proto-MahS について考える。また、参考として Arb. の資料も示す。(1) - (3) は proto-S の \*i に、(4) - (6) は proto-S の \*a に、(7), (8) は proto-S の \*u に対応する資料である。対応している音は、太字で示す。

- (1) ‘salt’ Mhr. məl<sup>h</sup>hat [J1: 266], Hrs. məl<sup>h</sup>hat [J2: 88], Jib. <sup>h</sup>miʕ<sup>h</sup>hot [J3: 171], Soq. <sup>h</sup>mil<sup>h</sup>hoh [J4b: 266]<sup>11</sup> < proto-S \*mil<sup>h</sup> [F: 80] / Arb. mil<sup>h</sup>-<sup>12</sup> [BK: 2.1144]。

<sup>11</sup> Mhr, Hrs. -at- / Jib. -ot- / Soq. -oh は女性標識である。proto-S の女性標識に関して、Militarev & Kogan (2000) は \*-at を、Fox (2003) は \*-t もしくは \*-at を再建している。

<sup>12</sup> Arb. のハイフンの後には格標識がくる (mil<sup>h</sup>-un 主格、mil<sup>h</sup>-in 属格、mil<sup>h</sup>-an 対格)。

- (2) ‘raven’ Mhr. *jəʔə'rajb* [J1: 140, 461], Hrs. *jəʔə'reb* [J2: 45]<sup>13</sup>, Jib. *ʔayə'reb* [J3: 2], Soq. *ʔa'reb* [N4: 118] < proto-S *\*ʔa:rib* [F: 85], [M&Kb: 129-131] / Arb. *yura:b*-<sup>14</sup> [BK: 2.451]。
- (3) ‘knee’ Mhr. *'bark* [J1: 52], Hrs. *'bark* [J2: 19], Jib. *'berk* [J3: 28], Soq. *'berk* [SL4: 1454] < proto-S *\*birk* [F: 80], *\*bi/ark* [M&Ka: 36-37] / Arb. *ba:rikat*-<sup>15</sup> [BK: 1.116]。

(1) の第1音節では Mhr., Hrs. *-ə-* / Jib., Soq. *-i-* という対応が見られる。proto-MahS では *\*-i-* を再建する。Mhr., Hrs. では、ストレスの置かれぬ所で、弱化して *-ə-* になった。他のセム諸語で proto-S の *\*-i-* を保持している例として、*milh-* (Arb.) を挙げることができる。

(2) の最終音節では Mhr. *-aj-* / Hrs., Jib., Soq. *-e-* という対応が見られる。proto-MahS では *\*-aj-* (Mhr. から) / *\*-e-* (Hrs., Jib., Soq. から) が候補となる。MahS の資料だけを考慮すると、proto-MahS の *\*-aj-* が縮合して *-e-* (Hrs., Jib., Soq.) になったと考えることができる。他のセム諸語で proto-S の *\*-i-* を保持している例として、*a:rib*-<sup>16</sup> (アッカド語) を挙げることができる。

Arb. では proto-S と同じ *milh-* (Arb. は女性標識 *-at* が付加されていないが、女性扱いになる場合もある) の形が見られる。MahS の女性標識は、proto-S から proto-MahS への変化で付加された可能性がある (MahS 以外に、ウガリト語の *mlht* の例が見られる。ウガリト語の *-t* は女性標識)。もしくは、Arb. の女性形としての *milh-* が借用される際に、女性形であることが強調された可能性がある。ただし、全ての MahS に女性標識が付加されており、別個に借用されたとは考えにくい。借用されたのなら proto-MahS の段階であろう。

<sup>13</sup> Mhr. と Hrs. では、語頭に *jə-* が付加されたと考えられる。

<sup>14</sup> Arb. では *yura:b-* の形が見られるが、Arb. の複数形には *yurba:m-* だけでなく *ʔayrub-* の形が見られる。Jib. と Soq. の *ʔa-* は Arb. の複数形の借用によるものとして考えることができる。しかし、Arb. の *ʔayrub-* の第2音節には *-u-* 母音が見られるのに対し、Jib. と Soq. では *-u-* 母音が見られないので、Jib. と Soq. の形は Arb. からの借用ではないと考えられる。

<sup>15</sup> Arb. では *barikat-* の形が見られる。MahS の形が Arb. からの借用であるなら、MahS の *-a- / -e-* は Arb. における *-a-* の影響の可能性はある。しかし、Arb. では *barikat-* のように、女性標識 *-at* が付加されている。Arb. からの *-at* が見られないので、MahS の形が proto-S からの変化であると説明できるが、Arb. の *barikat-* が proto-MahS の段階で借用されて、その後、proto-MahS で女性標識 *\*-at* が消失したとも説明できる。

<sup>16</sup> アッカド語のハイフンの後には格標識がくる (*a:rib-um* 主格, *a:rib-im* 属格, *a:rib-am*

proto-MahS で \*-aj- が再建されるなら、\*-i- (proto-S) > \*-aj- (proto-MahS) のように、二重母音化が起きたことになる。

(3) では Mhr., Hrs. -a- / Jib., Soq. -ε- という対応が見られる。proto-MahS では \*-a- (Mhr., Hrs.から) / \*-ε- (Jib., Soq.から) が候補となる。proto-S で \*-i- が再建されるなら、proto-S の \*-i- に開口度の近い \*-ε- が proto-MahS で再建される。他のセム諸語で proto-S の \*-i- を保持している例として、birk- (アッカド語) を挙げることができる。Fox (2003: 80) は \*birk のように \*-i- を、Militarev & Kogan (2000: 36-37) は \*bi/ark のように \*-i- / -a- を再建している。proto-S で \*-i- であったとすれば、\*-i- (proto-S) > -a- / -ε- (MahS) への変化が何故起きるのか。1つの可能性として、r の影響が考えられる。MahS の r は歯茎ふるえ音であるが、proto-S もしくは proto-MahS の \*-r- が口蓋垂ふるえ音の [r] であったとするなら、\*-i- が広母音化する可能性はある。

- (4) 'seed' Mhr. 'beðər [J1: 44], Hrs. 'baðr [J2: 15], Jib. 'beðər [J3: 22], Soq.— < proto-S \*baðr [F: 138] / Arb. baðr- [BK: 1.101]。  
 (5) 'soul, self' Mhr. hæ'nɔf [J1: 283], Hrs. hæ'nɔf [J2: 94], Jib. 'nuf [J3: 181], Soq. 'nɔf [J4b: 283] < proto-S \*napʃ [F: 77] / Arb. nafs- [BK: 2.1310]<sup>17</sup>。  
 (6) 'lord, husband' Mhr. 'bal [J1: 41], Hrs. 'bal [J2: 14], Jib. 'baʃal [J3a: 22], Soq. 'baʃl [J4c: 41] < proto-S \*baʃl [F: 75] / Arb. baʃl- [BK: 1.144]。

(4) の第1音節では Mhr. -e- / Hrs. -a- / Jib. -ε- という対応が見られる。proto-MahS では \*-e- (Mhr.から) / \*-a- (Hrs.から) / \*-ε- (Jib.から) が候補となる。このうちの母音を proto-MahS に再建すべきかは、MahS の資料だけでは不明である。proto-S で \*-a- が再建されるなら、Hrs.は proto-S の \*-a- を保持していることになり、proto-MahS でも \*-a- が再建される。他のセム諸語で proto-S の \*-a- を保持している例として、baðr- (Arb.) を挙げることができる。

(5) では Mhr., Hrs. -o- / Jib. -u- / Soq. -ɔ- という対応が見られる。proto-MahS

対格)。

<sup>17</sup> Mhr.と Hrs.の hæ- を Johnstone (1970: 295) は古い定冠詞の名残と考えている。

では \*-o- (Mhr., Hrs.から) / \*-u- (Jib.から) / \*-ɔ- (Soq.から) が候補となる。このうちの母音を proto-MahS に再建すべきかは、MahS の資料だけでは不明である。proto-S で \*-a- が再建されるなら、proto-S の \*-a- に開口度の近い \*-ɔ- が proto-MahS で再建される。他のセム諸語で proto-S の \*-a- を保持している例として、napist- (アッカド語) を挙げることができる。

(6) の第 1 音節では全ての MahS で -a- が共通しているため、proto-MahS に \*-a- を再建する。他のセム諸語で proto-S の \*-a- を保持している例として、baʕl- (Arb.) を挙げることができる。

(4), (5) から、proto-S の \*-a- が MahS で全体的に狭母音化することを想定するなら、(6) では proto-MahS の喉音 \*-ʕ- に隣接する環境で -a- が保持されたと考えられる。Jib. と Soq. では \*-a- 母音の保持の条件である \*-ʕ- が見られるのに対し、Mhr. と Hrs. では \*-ʕ- が消失している。しかし、(4) のように前寄りの母音が選択されていくのか、(5) のように後寄りの母音が選択されていくのかは不明である (Johnstone 1975: 11)。

(7) ‘all’ Mhr. ʔkal [J1: 207], Hrs. ʔkal [J2: 67], Jib. ʔkɔ(h)l [J3: 129], Soq. ʔkɔl, ʔkal [J4b: 207] < proto-S \*kull [F: 81] / Arb. kull- [BK: 2.918]。

(8) ‘ear’ Mhr. həjʔðe:n [J1: 3], Hrs. həjʔðe:m [J2: 1], Jib. ʔiʔðen [J3: 1], Soq. ʔidihen [L4: 53] < proto-S \*ʔuðn [F: 81], [M&Ka: 6-7] / Arb. ʔuðn- [BK: 1.21]<sup>18</sup>。

(7) では Mhr., Hrs., Soq. -a- / Jib., Soq. -ɔ- という対応が見られる。Soq. では -a- と -ɔ- が見られる。proto-MahS では \*-a- (Mhr., Hrs., Soq.から) / \*-ɔ- (Jib., Soq.から) が候補となる。1つの可能性として、-l の影響で \*-a- (proto-MahS) > -ɔ- (Jib., Soq.) のような後寄りの狭母音化が起きたと考えられる<sup>19</sup>。proto-MahS で \*-a-、proto-S で \*-u- が再建されるなら、proto-S から Jib., Soq. への変化で、\*-u- (proto-S) > \*-a- (proto-MahS) > -ɔ- (Jib., Soq.) のように、一度、広母音化が起きて、再び後寄りの狭母音化が起きたことになる。他の

<sup>18</sup> Mhr. と Hrs. の hə- については注 17 を参照。

<sup>19</sup> l と円唇性の関係については、城生 (1992: 83) を参照。

セム諸語で proto-S の \**-u-* を保持している例として、kullat- (アッカド語) を挙げることができる。

(8) の語中では Mhr., Hrs. -j- / Jib., Soq. -i- という対応が見られる。proto-MahS では \**-j-* (Mhr., Hrs. から) / \**-i-* (Jib., Soq. から) が候補となる。proto-MahS では \**-i-* を再建する。Mhr. と Hrs. で *hə-* が付加されて、\**ʔ-* が消失し、\**həi-* > *həj-* の変化が起きたと考えられる。他のセム諸語で proto-S の \**-u-* を保持している例として、uzn- (アッカド語) を挙げることができる。

MahS の(7), (8) では proto-S の \**u* の痕跡が見られない。(8) のように \**-u-* (proto-S) > \**-i-* (proto-MahS) の変化が何故起きるのかは不明である。

### 3.2 子音の問題

proto-MahS の子音を考てゆくが、母音の場合と同様、proto-S からの変化も見えていく。以下の表 13 は proto-S の子音である (Militarev & Kogan 2000: lxvii)。

表 13

proto-S	両唇音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	咽頭音	声門音
破裂音	*p *b		*t *d			*k *g		*ʔ
鼻音	*m		*n					
ふるえ音			*r					
摩擦音		*θ *ð	*s *z	*ʃ		*x *ɣ	*ħ *ʕ	*h
側面摩擦音			*ɬ					
接近音	*w				*j			
側面接近音			*l					
喉頭化音 or 放出音		*θ <sup>*レ</sup>	*t <sup>*レ</sup> *s <sup>*レ</sup> *ɬ <sup>*レ</sup>			*k <sup>*レ</sup>		

\*レ 喉頭化音もしくは放出音の可能性がある (Huehnergard 2000: 5-6)。

MahS の子音研究の中でも、以下の (9) - (12) のような ʃ, ɕ<sup>ʎ</sup>, h, hj, jh の対

応に関しては問題点が多く、今日まで議論が続いている。本稿では音対応を示し、問題点を指摘するに留める。その解決は今後の課題とする。

- (9) ‘seven’ Mhr. *hoba* [J1: 150], Hrs. *hoba* [J2: 49], Jib. *ʃoʃ* [J3: 259], Soq. *ʃho:bəʃ* [J4b: 150] < proto-S *\*ʃabʃ* [B: 24], [F: 77] / Arb. *sabʃ-* [BK: 1.1045]。
- (10) ‘green, yellow’ Mhr. *həʔɣawr* [J1: 163], Hrs. *həʔɣor* [J2: 54], Jib. *ʃədɣʔror* [J3: 265], Soq. *ʃəɣrhar* [J4a: 265] / Arb. –。
- (11) ‘tongue’ Mhr. *əwʃen* [J1: 256], Hrs. *leʃən* [J2: 85], Jib. *elʔeʔen* [J3: 165], Soq. *leʃin* (Johnstone 1975: 24) < proto-S *\*liʃ(ʃ)a:n* [M&Ka: 164-165], *\*liʃan* [F: 85] / Arb. *lisa:n-* [BK: 2.991]。
- (12) ‘tree’ Mhr. *hər'majt* [J1: 160], Hrs. *hə'rom* [J2: 52], Jib. *he'rum* [J3: 99], Soq. *hərəm* [J4b: 160], *ʃerham* [N4: 112] / Arb. –。

(9) の語頭では Mhr., Hrs. *h-* / Jib. *ʃ-* / Soq. *jh-* という対応が見られる。Leslau (1938: 32-35) は (9) の起源 (proto-S もしくは proto-MahS) として *\*ʃ-* を考えている。語頭の環境にあるが、隣接する母音の影響で、*\*ʃ > h ~ jh* という子音弱化が起きたと考えられる (Hock 1986: 80-86 を参照)。

(10) の語頭では Mhr., Hrs. *h-* / Jib., Soq. *ʃ-* という対応が見られる。Soq. 以外の MahS では (9) と似たような振る舞いをしている。(10) でも起源として *\*ʃ-* が再建されるのであれば、Soq. において *jh-* と *ʃ-* に分裂する条件を考える必要がある。

(11) の語中では Mhr., Hrs. *-ʃ-* / Jib. *-eʔ-* / Soq. *-ʃ-* という対応が見られる。Fox (2003: 85) は proto-S で *\*-ʃ-* を再建している。proto-S の *\*ʃ* が Mhr., Hrs. において (9) と (10) のように *h* に変化する条件と、(11) のように保持される条件を考える必要がある。また、proto-S の *\*ʃ* が Jib. において (9) と (10) のように保持される条件と、(11) のように *eʔ* に変化する条件を考える必要がある。

(12) の語頭では Mhr., Hrs., Jib. *h-* / Soq. *h- ~ ʃ-* という対応が見られる。(9), (10), (11) とは異なり、Jib. でも *h-* が見られ、Soq. の変種に *ʃ-* が見られるだ

けである。従って、(12) も (9), (10), (11) のように \*ʃ- に遡ると考えるのは安易であろう。

#### 4 おわりに

共時的な問題として、特に Jib.の問題が挙げられる。Jib.はストレスが置かれない音節で弱化した ə が見られるというストレスアクセントの特徴を示す。しかし、同じ強さのストレスが複数個所に置かれる場合があり、Jib.のプロソディーの詳細な調査を要する。また、子音に関して、後部歯茎舌背摩擦音とされる ɸʷ, ʁʷ, ɸʷ' についても調査が必要である。

通時的な問題は2つある。1つ目は、proto-MahS の母音再建の問題である。今日まで研究者は子音を重視して、母音について語られることはほとんどなかった。先ずは MahS の音対応を見つめ直す必要がある。2つ目は、子音の中でも無声後部歯茎摩擦音と無声声門摩擦音の対応である。極めて複雑な対応が示されており、その起源と歴史的変化を説明する必要がある。

#### 【参照文献】

- Blažek, V. (2001) 'Etymologizing the Semitic Cardinal Numerals of the First Decad.' In: A. Zaborski (ed.) *New Data and New Methods in Afroasiatic Linguistics*. 13-37. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- de Biberstein-Kazimirski, A. (1860) *Dictionnaire arabe-français*. Vol.1-2. Beyrouth: Libraire du Liban.
- Faber, A. (1986) 'Semitic Sibilants in an Afro-Asiatic Context.' *Journal of Semitic Studies* 29: 189-224.
- Fox, J. (2003) *Semitic Noun Patterns*. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Hetzron, R. (1976) 'Two Principles of Genetic Reconstruction.' *Lingua* 38: 89-108.
- Hock, H. H. (1986) *Principles of Historical Linguistics*. Berlin / New York / Amsterdam: Mouton de Gruyter.
- Huehnergard, J. (1992) 'Languages (Introductory).' In: D. N. Freedman (ed.) *The Anchor Bible Dictionary*. Vol.4 k-n. 155-170. New York: Doubleday.



- (2000) 'Introduction to the Comparative Semitic Languages.' Course Outline of Semitic Philology 140. Harvard University. <http://www.courses.fas.harvard.edu/~sph1140/syllabus/outline.html>.
- (2004) 'Afro-Asiatic.' In: R. W. Woodard (ed.) *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*. 138-159. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johnstone, T. M. (1968) 'The Non-Occurrence of a *t*-Prefix in Certain Socotri Verbal Forms.' *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 31: 515-525.
- (1970) 'A Definite Article in the Modern South Arabian Languages.' *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 33: 295-307.
- (1975) 'The Modern South Arabian Languages.' *Afroasiatic Linguistics* 1 / 5: 1-29.
- (1977) *Harsūsi Lexicon*. London / New York / Toronto: Oxford University Press.
- (1981) *Jibbāli Lexicon*. New York: Oxford University Press.
- (1984) 'New Sibilant Phonemes in the Modern South Arabian Languages of Dhofar.' In: J. Bynon (ed.) *Current Progress in Afro-Asiatic Linguistics*. 389-390. Amsterdam: J. Benjamins.
- (1987) *Mehri Lexicon and English-Mehri Word List: with Index of the English Definitions in Jibbāli Lexicon compiled G. R. Smith*. London: School of Oriental and African Studies.
- 城生佰太郎 (1992) 『音声学 新装増訂 3 版』バンダイ・ミュージックエンタテインメント。
- Leslau, W. (1937) 'Der š-Laut in den modernen südarabischen Sprachen.' *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 44: 211-218.
- (1938) *Lexique soqotri (sudarabique moderne): avec comparaisons et explication étymologiques*. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Lonnet, A., and M.-C. Simeone-Senelle (1983) 'Observations phonétiques et phonologiques sur les consonnes d'un dialecte mehri.' *Matériaux arabes et sudarabiques* 1: 187-217.

- (1997) 'La phonologie des langues sudarabiques modernes.' In: A. S. Kaye (ed.) *Phonologies of Asia and Africa*. Vol.1. 337-372. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Militarev, A., and L. Kogan (2000) *Semitic Etymological Dictionary. Vol.1: Anatomy of Man and Animal*. Münster: Ugarit-Verlag.
- (2005) *Semitic Etymological Dictionary. Vol.2: Animal Names*. Münster: Ugarit-Verlag.
- Nakano, A. (1986) *Comparative Vocabulary of Southern Arabic: Mahri, Gibbali and Soqotri*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- 中野暁雄 (1992) 「南アラビア語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 世界言語編 (下)』第 4 卷. 291-298. 三省堂.
- (1998) 「アフロ・アジア語の音声・音韻: 子音音素論」『音声研究』2: 9-30.
- Simeone-Senelle, M.-C. (1997) 'Sukūtra.' In: C. E. Bosworth (ed.) *The Encyclopaedia of Islam*. Vol.9 san-sze. 806-811. Leiden: Brill.
- (1998) 'The Modern South Arabian Languages.' In: R. Hetzron (ed.) *The Semitic Languages*. 378-423. London / New York: Routledge.
- Simeone-Senelle, M.-C., and A. Lonnet (1991) 'Lexique soqotri: les noms des parties du corps.' In: A. S. Kaye (ed.) *Semitic Studies in Honor of Wolf Leslau*. Vol.2. 1441-1487. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Voigt, R. M. (1987) 'The Classification of Central Semitic.' *Journal of Semitic Studies* 32: 1-21.

# Problems with Phonological Reconstruction of Proto Mahrian Semitic

NINOMIYA Takashi

This paper points out some problems concerning reconstruction of Proto Mahrian Semitic. As synchronic problems, the prosody and dorso-alveolars in Jibbāli are discussed among others. Diachronic problems concern vowels and unvoiced post alveolar consonants. Sound correspondences of the latter can be summarized as follows:

- Mhr., Hrs. *h* / Jib. *f* / Soq. *jh*
- Mhr., Hrs. *h* / Jib., Soq. *f*
- Mhr., Hrs. *f* / Jib. *çʰ* / Soq. *f*
- Mhr., Hrs., Jib. *h* / Soq. *h ~ f*